

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区の地機と杵機と高機

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5220

整経式では、輪状整経式や擬似輪状整経式の2倍の長さに経糸を張りわたすこととなる。したがって、輪状整経式と擬似輪状整経式は、平整経式よりも空間の利用効率がすぐれているといえる。なお、空間利用効率は、枠機の設置方式とも関係しており、設置方式が垂直式と傾斜式のほうが、水平式よりも空間利用効率がすぐれている。ちなみに、平整経式の枠機の設置方式については、今回、調査したすべての事例が水平式であった。

<開口具の設置方式について>

開口具の設置方式では、綜統固定・開口保持棒可動式と綜統固定・開口保持板可動式という2方式がある。これらの違いは、基本的には開口保持具が棒であるか、板であるかという違いであるが、このことは経糸の開口操作に反映している。開口保持棒と開口保持板による開口操作の違いについては、第1節の地機の開口操作方式の項で述べている。それらを要約すれば、開口保持棒による開口操作では、経糸の開口がスムーズにおこなえず、弾き棒や手のひらによる補助的な操作を必要としている。これに対して、開口保持板では、平板な状態で寝かせてある開口保持板を手前に引き寄せるとともに、開口保持板を寝かせていた状態から引き起こすことによって、経糸の上糸と下糸を押し広げて、比較的容易に開口をおこなっている。このことから、開口具の設置方式を比較すると、綜統固定・開口保持板可動式のほうが経糸の開口をおこなうさいの操作性がすぐれているといえる。

<綜統固定具について>

綜統固定具には、すでに述べているように逆Y字形の綜統固定具を使用している例、石、木片、缶などを綜統固定具として使用している例、三脚を綜統固定具として使用している例、弓状の綜統固定具を使用している例がある。これらの綜統固定具については、綜統を下から支えて固定するか、上から吊るして固定するかという、綜統の固定方式の違いと、綜統固定具の形状のちがいがあがるものの、構造・機能論的な視点による相互の比較は不可能である。ただし、石、木片、缶などを綜統固定具として使用している例は、イランのクルド人遊牧民の地機【IGF-

1】とカシュカイ人遊牧民の地機【IGF-2】の2例のみであり、こうした例は、遊牧民の移動に便利のように、必要最少限のものしか持たないという行動様式の反映と考えることができる。なお、中国・新疆ウイグル自治区のカザフ人遊牧民の綜統固定具は鉄製の三脚を使用していたが、そうした三脚もかつては、移動先で木の枝などを切ってつくられていた。

2) 汎用機の構造・機能論的な傾向

汎用的に使用されている14例の地機は、いずれも経糸の保持方式が固定式であること、開口具の基本構成型式が単式輪状綜統型であること、開口具の操作方式が綜統固定・開口保持具可動式であることで共通している。したがって、これらは、イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区における地機の基本的な構造として位置づけられる。以下では、こうした特徴をそなえた地機の7種類の型式全般にわたる構造・機能論的な傾向をあきらかにする。

前節で提示した汎用的な地機の型式分類では、分類項目として、経糸保持具の構成型式、整経方式、開口具の設置方式、綜統固定具の違いを取りあげた。これらのうち、経糸保持具が杭・横木型(杭・紐型)の地機は5型式(G1BYF型、G1BYC型、G1BTC型、G1BUJ型、G1STJ型)11例、横木型の地機は2型式(G2SBF型、G2SYJ型)3例で、事例数としては、杭・横木型(杭・紐型)の地機が圧倒的に多い。また、開口具の設置方式が綜統固定・開口保持板可動式の地機は4型式(G1BYF型、G1BYC型、G1BTC型、G1BUJ型)10例、綜統固定・開口保持棒可動式の地機は3型式(G1STJ型、G2SBF型、G2SYJ型)3例で、綜統固定・開口保持板可動式の地機が圧倒的に多い。そしてさらに、整経方式については、平整経式の地機は2型式(G1BYF型、G2SBF型)3例、輪状整経式の地機は2型式(G1BYC型、G1BTC型)8例、擬似輪状整経式の地機は3型式(G1BUJ型、G1STJ型、G2SYJ型)3例であり、輪状整経式の地機が圧倒的に多い。なお、これらの相関関係を見てみると、経糸保持具を杭と横木で構成した型式の5型式11例のうち4型式

(G1BYF型、G1BYC型、G1BTC型、G1BUJ型) 10例は、開口具の設置方式が綜統固定・開口保持板可動式であり、このうち2型式(G1BYC型、G1BTC型) 8例の整経方式は輪状整経式である。したがって、これらの構成要素をそなえた、G1BYC型とG1BTC型の地機は、今回の調査地域におけるもっとも普遍的、かつ代表的な地機の型式として位置づけられる。

なお、いまひとつの分類項目である綜統固定具については、それぞれの素材や形状に大きな違いがあるものの、綜統固定具としての機能については、共通している。ただし、これらのうち、逆Y字形の綜統固定具、弓状の綜統固定具、三脚は、いずれも本来は木の枝を利用してつくられていたものであり、石、木片、缶などの綜統固定具のうち、木片や缶についても、本来は石が使われることが多かったようである。したがって、こうしたことから、綜統固定具の種類の違いは、本質的に、素材となる木が入手しやすい草原地帯や、石がいたるところにある砂礫地帯といった、機織りをおこなってきた民族が生活のよりどころとしてきた地理的な環境に対応しているという可能性が考えられる。

なお、7種類の地機の型式を、機織りの生産性に注目してみると、開口保持具の設置方式では、綜統固定・開口保持棒可動式よりも、綜統固定・開口保持板可動式のほうが、生産性においてすぐれているといえる。したがって、汎用的な地機の型式では、G1BYF型、G1BYC型、G1BTC型、G1BUJ型のほうが、G1STJ型、G2SBF型、G2SYJ型よりも生産性において優位にあるといえ、開口具の設置方式は、綜統固定・開口保持棒可動式から綜統固定・開口保持板可動式への移行傾向が考えられる。また、整経方式では、一般的に、平整経式から、輪状整経式や擬似輪状整経式への移行傾向があるといえる。ただし、7種類の地機の型式においては、経糸保持具の構成型式、開口具の設置方式、綜統固定具の種類、整経方式は、相互に入り組んで複雑な組み合わせとなっていることから、具体的に特定の型式のあいだに移行傾向が考えられるのは、G1BYF型からG1BYC型へという1例のみである。

3) 特殊織物専用機の構造・機能論的な傾向

特殊織物専用の地機としては、むしろ織り専用のG2XXF型【IGF-3】と、細紐織り専用のGXSFF型【UGF-2】がある。これらの型式のあいだには、経糸の保持方式が固定式で、整経方式が平整経式であることについての共通点があるにすぎない。したがって、以下では、個々の型式を汎用的な地機との関係においてあきらかにしておくこととする。

<G2XXF型>

この型式は、経糸保持具の構成型式と整経方式については、それぞれに一部の汎用的な地機との共通点が見いだせるものの、開口具がそなわっていないことと、むしろ織りに独特の板状緯打具については、他の地機とのあいだには、まったく共通点がない。したがって、この型式は、むしろ織り専用の特殊な地機であるとともに、その構造的にもきわめて特殊な型式として位置づけられる。

<GXSFF型>

この型式は、経糸保持具の構成型式、開口具の設置方式が、汎用的な地機とは、まったく異なっている。とくに、汎用的な地機の地組織を織るための開口具の設置方式は、綜統固定・開口保持具可動式である。このことは、今回の調査地域における汎用的な地機の重要な特徴のひとつにあげられるが、この型式の開口具の設置方式は、綜統・開口保持具可動式である。したがって、このGXSFF型は、今回、調査した地機のうちでは、唯一の例外的な開口具の設置方式をそなえた型式の地機として位置づけられる。

2 枠機

枠機は、前節において、機枠の設置方式、経糸保持具の構成型式、整経方式、開口具の基本構成型式、輪状綜統型経糸整列具の有無などの違いによって、調査対象とした30例の枠機を11種類の型式に分類した。したがって、以下では、それらの分類項目ごとの構造・機能論的な傾向、および、枠機の型式全般にわたる構造・機能論的な傾向をあきらかにする。

1) 枠機の分類項目ごとの構造・機能論的な傾向

<機枠の設置方式について>

機枠の設置方式には、水平式、垂直式、傾斜式の3方式がある。ただし、前節ですでに述べているように、機枠の型式分類をおこなううえでは、便宜的に垂直式と傾斜式は、一括して垂直・傾斜式とし、機枠の型式分類では、機枠の設置方式を、水平式と垂直・傾斜式の2方式とした。これらの設置方式の違いを構造・機能論的な視点から見たばあい、機織りのさいのスペースや織り手の姿勢に違いがあらわれている。スペースについては、水平式は、垂直・傾斜式よりも広い面積を必要としており、垂直・傾斜式は、水平式よりも高い空間を必要としている。したがって、遊牧民のように、一般にスペースに制約のないばあいとは異なり、住居などのスペースが制約された場所で機織りをするさいの空間の有効利用を考慮したばあいには、垂直・傾斜式のほうが適しているといえる。また、織り手の姿勢については、水平式のばあいには、地機のばあいと同様に、しゃがんだ姿勢で機織りをおこなっており、垂直・傾斜式のばあいには、椅子や腰掛けに座った姿勢で機織りをおこなっている。このような織り手の姿勢の違いについては、遊牧民の定住化をはじめとする生活様式の変化が大きく影響していると考えられ、単純に優劣の比較はできないが、現代の生活様式の変容過程においては、しゃがむという姿勢は、次第に少なくなり、椅子に座ることが普遍化している。そして、こうした現代における生活様式の変化は、機枠の設置方式においても、水平式から垂直・傾斜式へ移行しやすい状況を生みだしているといえる。したがって、機枠の設置方式は、構造・機能論的にも、室内空間という制約されたスペースの有効利用することを目的として、水平式から垂直・傾斜式へと移行してきたという傾向がうかがわれる。

<経糸保持具の構成型式について>

前節では、機枠の型式分類の項目としての経糸保持具の構成型式は、2本の経糸保持棒による構成型式と経巻き棒と布巻き棒による構成型式の2型式とした。これらの構成型式については、経糸と緯糸のみによる一般的な機織りでは、経糸保持具が経巻き棒と布巻き棒で構成しているほうが、制約されたス

ペースにおいても、長い織物を織ることができるという利点がある。しかし、機枠の大半の事例では、パイル糸を使用したカーペットを織っており、それらの経糸保持具の構成型式は、すべては2本の経糸保持棒による構成型式であった。そして、経糸保持具が経巻き棒と布巻き棒による構成型式では、経糸と緯糸のみを使用した緯糸浮織のカーペットを織っていた。したがって、経糸保持具の構成型式の違いは、機枠の構造においては、明確な違いがあり、構成型式の違いによって型式を分類することはできないものの、機能的な視点においては、構成型式の違いは、比較の対象とはなりえない。

<整経方式について>

機枠の整経方式では、平整経式、輪状整経式、擬似輪状整経式の3方式を確認している。これらの整経方式については、すでに述べているように、おなじ長さの織物を織るばあいには、平整経式では、輪状整経式や擬似輪状整経式の2倍の長さに経糸を張りわたすこととなる。したがって、住居などのスペースが制約された場所で、長い織物を織るばあいには、輪状整経式や擬似輪状整経式の整経方式のほうが適している。一般的に、スペースに制約のないクルド人の遊牧民の使用する機枠【IFF-2】の整経方式が平整経式であり、おなじクルド人でも定着民で住居の中に設置した機枠【IFC-9】【IFJ-1】で機織りをしているばあいには、整経方式が輪状整経式や擬似輪状整経式であることは、このことを反映していると考えられ、遊牧民の定住化の過程においては、機枠の整経方式が平整経から輪状整経や擬似輪状整経に移行した可能性を考慮することができる。また、機枠の設置方式には、水平式、垂直式、傾斜式の3方式があり、さきのクルド人の遊牧民の機枠の設置方式が水平式であることも、スペースに制約のないことの反映であると思われる。

<開口具の基本構成型式について>

開口具の基本構成型式には、単式輪状綜統型、複合単式輪状綜統型、無綜統型という3方式がある。このうち、単式輪状綜統型のばあいでは、開口具の設置方式が綜統固定・開口保持具可動式であり、開口保持具を動かすことによって、経糸の開口と逆開

口がおこなう。ただし、実際の開口操作は、経糸が太くて毛羽立っていて、経糸同士がからみやすくなっているために、開口と逆開口がスムーズにおこなえない。そのために、手のひらで経糸を押しという補助的な操作を必要としている。つぎに複合単式輪状綜統型のばあいでは、2枚1組の輪状綜統が天秤仕掛けになっており、天秤を手で上下にスライドさせることによって、経糸の開口と逆開口がスムーズに繰り返される。そして、無綜統型では、開口具がないことから、綴織のばあいには、緯糸は、経糸の奇数列、あるいは、偶数列を指先でひろって通している。また、おなじく無綜統型でパイル織のばあいには、2層の経糸に太い緯糸と細い緯糸をあたかも立体交差させるようにして通している。

したがって、開口具の基本構成型式のうちでは、複合単式輪状綜統型がもっとも操作性にすぐれているといえ、パイル織のカーペット専用の枠機では、単式輪状綜統型から複合単式輪状綜統型への移行傾向を考えることができる。また、生産性や操作性においては、一般的には、無綜統型よりも単式輪状綜統型のほうがすぐれているといえるが、無綜統型では2層の経糸に太い緯糸と細い緯糸を通す独特の方式がとられていることから、双方の操作性は大差ない。なお、無綜統型でパイル織をおこなっているばあいの2層の経糸に太い緯糸と細い緯糸を通す方式は、経糸の密度を高くして、パイル密度の高いカーペットを織ることが容易になるという利点があり、この方式は、20世紀半ば頃から始まったと言われている。そして、こうした方式以前には、開口具の基本構成型式が単式輪状綜統型の枠機を使用してパイル織をおこなっていたということであった。

<経糸整列具の有無について>

枠機の輪状綜統型経糸整列具は、地機や高機のばあいとは、まったく異なり、その形状が輪状綜統と同一でありながら、枠機のパイル織において、実際には綜統としてではなく、経糸整列具として機能しているという、きわめて特殊なものである。この輪状綜統型経糸整列具は、その形状からは、本来は開口具の基本構成型式が単式輪状綜統型の輪状綜統として機能していたものであることは、間違いないも

のとみられる。したがって、この輪状綜統型経糸整列具の使用は、さきに述べている、20世紀半ば頃に始まったとされる2層の経糸に太い緯糸と細い緯糸を通す方式とともに始まったと見られ、それ以前の輪状綜統の経糸整列具への転用と考えられる。

2) 枠機の構造・機能論的な傾向

調査対象とした30例の枠機は、経糸の保持方式が固定式であることで共通している。したがって、このことは、枠機の構造上のもっとも大きな特徴として位置づけられる。以下では、こうした特徴をそなえた枠機の11種類の型式全般にわたる、構造・機能論的な傾向をあきらかにする。

前節で提示した枠機の型式分類では、分類項目として、機枠の設置方式、経糸保持具の構成型式、整経方式、開口具の基本構成型式、輪状綜統型経糸整列具の有無を取りあげた。これらのうちで、機枠の設置方式が、水平式の地機の型式は2型式（FHFFX型、FHFFS型）8例で、垂直・傾斜式の枠機の型式は9型式（FVFFZ型、FVFFS型、FVWFW型、FVFCX型、FVFCZ型、FVFCS型、FVFJZ型、FVFJS型、FVFJW型）22例で、事例数と型式数ともに垂直・傾斜式がかなり多い。また、経糸保持具の構成型式が、2本の経糸保持棒による構成型式の枠機の型式は10型式（FHFFX型、FHFFS型、FVFFZ型、FVFFS型、FVFCX型、FVFCZ型、FVFCS型、FVFJZ型、FVFJS型、FVFJW型）28例、経巻き棒と布巻き棒による構成型式の枠機は1型式（FVWFW型）2例で、事例数と型式数ともに、2本の経糸保持棒による構成型式が大多数を占めている。さらに、そして、整経方式が平整経式の枠機の型式は5型式（FHFFX型、FHFFS型、FVFFZ型、FVFFS型、FVWFW型）13例、輪状整経式の枠機の型式は3例（FVFCX型、FVFCZ型、FVFCS型）12例、擬似輪状整経式の枠機の型式は3型式（FVFJZ型、FVFJS型、FVFJW型）5例ある。また、開口具の基本構成型式が、単式輪状綜統型の枠機の型式は4型式（FHFFS型、FVFFS型、FVFCS型、FVFJS型、）10例、複合単式輪状綜統型の枠機の型式は2型式（FVWFW型、

FVFJW型)が5例、無綜統型の枠機の型式は2型式(FHFFX型、FVFCX型)10例である。ただし、開口具の基本構成型式が無綜統型のうちには、単式輪状綜統型の輪状綜統と同様の形状をした輪状綜統型経糸整列具をそなえた1型式(FVFCX型)5例がある。

枠機の分類項目ごとの型式数と事例数は、以上のとおりであり、分類項目ごとの分析をあわせて考えると、枠機は基本的に、カーペット専用機として位置づけられる。そして、とくに経糸保持具が2本の棒で構成された10型式(FHFFX型、FHFFS型、FVFFZ型、FVFFS型、FVFCX型、FVFCZ型、FVFCS型、FVFJZ型、FVFJS型、FVFJW型)は、パイル織のカーペット織るための専用機として位置づけられる。さらに、経糸保持具が経巻き棒と布巻き棒で構成された1型式(FVWFW型)は、緯糸浮織のカーペットを織るための専用機として位置づけられる。また、機枠の設置方式の分析からは、水平式から垂直・傾斜式への移行傾向、整経方式の分析からは、平整経式から、輪状整経式や擬似輪状整経式への移行傾向がうかがいあがっている。そしてさらに、開口具の基本構成型式、および、輪状綜統型経糸整列具の有無の分析からは、開口具の基本構成型式が、単式輪状綜統型から無綜統型へという、一般的な織機の型式展開ではありえない特殊な移行傾向がうかがわれる。なお、以上のことから、パイル織専用の枠機の型式のあいだには、FHFFS型からFHFFX型へ、FHFFS型からFVFFS型へ、FHFFX型からFVFCX型へ、FVFFS型からFVFCS型へ、FVFFS型からFVFFZ型へ、FVFFS型からFVFJS型へ、FVFCS型からFVFCZ型へ、FVFFZ型からFVFCZ型へ、FVFFZ型からFVFJZ型へ、FVFJS型からFVFJZ型へ、FVFJS型からFVFJW型へという、11例の移行傾向が浮かびあがってくる。

3 高機

高機は、前節において、経糸の保持方式、経糸保持具の構成型式、緯打補助具としての腕木の有無、緯入補助具としての飛杼装置の有無などによって、8種類の型式に分類した。したがって、以下では、

それらの分類項目ごとの構造・機能論的な傾向、および、高機の型式全般にわたる構造・機能論的な傾向をあきらかにする。

1) 高機の分類項目ごとの構造・機能論的な傾向 〈経糸の保持方式について〉

高機の経糸の保持方式には、固定式と垂下式の2方式がある。これらの保持方式のうち、固定式のばあいには、構造・機能論的には、経糸の開口や逆開口のさいに、奇数列と偶数列の経糸、あるいは、上糸と下糸に交互に一定の負荷がかかる。また、緯糸の打ち込みのたびにも経糸に一定の負荷がかかる。このことは、垂下式のばあいにも基本的には同様であるが、垂下式のばあいには、経糸にかかる負荷を錘りの上下動によってやわらげることとなる。したがって、経糸の保持方式においては、固定式よりも垂下式の保持方式のほうが、糸にやさしく、風合いのある織物を織ることができるという点ですぐれているといえる。なお、高機以外の織機で、経糸の保持方式が垂下式の織機としては、ヨーロッパで紀元前から使用されてきた錘り機が知られているのみであり、高機における垂下式の経糸の保持方式は、そうしたヨーロッパの錘り機の影響である可能性が大きいと考えられる。

〈経糸保持具の構成型式について〉

高機の経糸保持具の構成型式には、前節ですでに述べているように、経糸保持棒と布巻き棒による構成型式、経巻き棒と布巻き棒による構成型式、錘りの付属した経糸保持棒、あるいは、経巻き棒と、布巻き棒による構成型式、経糸保持棒と布巻き棒の双方に錘りが付属した構成型式の4型式がある。これらの違いは、基本的には、前項で述べたことと同様であり、経糸保持棒、あるいは、経糸保持棒と布巻き棒に錘りが付属した構成型式のほうが、錘りの付属しない構成型式よりも、糸にやさしく、風合いのある織物を織ることができるという点ですぐれているといえる。

〈腕木の有無について〉

緯打具である箴は、いずれも紐か木枠などで、上部から吊るしてあるが、紐で吊るした箴には、腕木

がそなわっているばあいと、そなわっていないばあいがある。こうした腕木の有無は、経糸のあいだに緯糸を打ち込むさいに、箎のみで打ち込むよりも、腕木が付属した箎で打ち込んでほうが、腕木の重量による弾みによって、織り手の労力が軽減される。また、箎は両端が腕木によって保持されていることから、箎による打ち込みは、安定した水平移動が可能となり、織むらのない均質な織物を織ることが容易となる。したがって、腕木が付属した箎のほうが、腕木のない箎よりも、操作性においてすぐれている。〈飛杼装置の有無について〉

緯入補助具である飛杼装置は、1733年にイギリス人のJohn Kayによって発明された。この装置は、木枠によって上部から吊るした箎と一体となっており、織り手が片手で紐を引くことによって、経糸のあいだを杼が左か右、あるいは右から左に弾き飛ばして、高速度の緯入運動をおこない、もう一方の手で箎による緯糸の打ち込みをおこなう。したがって、このような飛杼装置は、杼を経糸のあいだに手で通すばあいとと比較すると、その操作性は格段にすぐれている。なお、この飛杼装置の導入は、織物の大量生産を可能としたが、複雑な組織の紋織物の製織には不向きであり、平織組織、縹子織組織などの無地織物や経緋の機織りに使用されている。

2) 高機の構造・機能論的な傾向

調査対象とした19例の高機は、整経方式が平整整経式、開口具の基本構成型式が複合単式輪状綜統型、開口具の設置方式が番目綜統可動式、開口操作方式が足踏み式であることで共通している。したがって、これらは、高機の構造上のもっとも大きな特徴として位置づけられる。以下では、こうした特徴をそなえた高機の8種類の型式全般にわたる、構造・機能論的な傾向をあきらかにする。

前節で提示した高機の型式分類では、分類項目として、経糸の保持方式、経糸保持具の構成型式、緯打補助具としての腕木の有無、および、緯入補助具としての飛杼装置の有無を取りあげた。これらのうちで、経糸の保持方式が固定式の高機は3型式(TF1XX型、TF1AX型、TF2XX型)3例、垂下式

の高機は5型式(TW1XX型、TW1AX型、TW3XF型、TW4XF型、TW4AX型)16例あり、事例数は経糸保持具が垂下式の枠機が圧倒的に多い。また、経糸保持具の構成型式が経糸保持棒と布巻き棒による構成型式の高機は2型式(TF1XX型、TF1AX型)2例、経巻き棒と布巻き棒による構成型式の高機は1型式(TF2XX型)1例、錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒による構成型式の高機は3型式(TW3XX型、TW3AX型、TW3XF型)14例、錘りが付属した経糸保持棒と錘りが付属した布巻き棒による構成型式の高機は2型式(TW4XF型、TW4AX型)2例となる。これらを錘りの有無で見ると、経糸保持具に錘りが付属しない構成型式の高機は3型式(TF1XX型、TF1AX型、TF2XX型)3例、経糸保持具に錘りが付属する構成型式の高機は5型式(TW3XX型、TW3AX型、TW3XF型、TW4XF型、TW4AX型)16例となる。したがって、経糸の保持方式が垂下式で、経糸保持具に錘りが付属した構成型式をそなえたTW系の5種類の型式は、今回の調査地域におけるもっとも普遍的、かつ代表的な高機の型式として位置づけられる。そして、これら的高機では、平織組織のほか、綾織組織や縹子織組織、あるいは、紋織組織などの、平織組織に比べるとはるかに複雑な織物が数多く織られており、経糸の保持方式が固定式の高機でもっぱら平織組織の織物が織られていることと、好対照を見せている。また、その他の分類項目のうち、緯打補助具としての腕木の有無については、腕木をそなえているものが3型式(TF1AX型、TW3AX型、TW4AX型)8例、また、緯入補助具としての飛杼装置をそなえているものが2型式(TW3XF型、TW4XF型)4例ある。これらについては、いずれも紋織物以外の比較的単純な組織で構成される織物を織るための高機の型式として位置づけられる。さらに、このような腕木や飛杼装置をそなえた型式は、高機の操作性や織物の生産性の向上を意図したばあいには、それぞれ腕木をそなえていない型式や、飛杼装置をそなえていない型式から腕木をそなえた型式や、飛杼装置をそなえた型式への移行傾向が考えられる。

したがって、以上のことから、単純に高機の操作性や織物の生産性の向上を考慮したばかりには、TF系の高機のあいだには、TF1XX型からTF1AX型という型式の移行傾向、TW系の高機のあいだには、TW3XX型からTW3AX型、TW3XX型からTW3XF型という型式の移行傾向が浮かびあがってくる。

4. 分布論的な傾向

ここでは、第2節で提示した地機と枠機と高機の個々の型式分布にもとづき、地機と枠機と高機の諸型式に認められる分布論的な傾向をあきらかにする。

1 地機

地機は、第2節において、汎用機と特殊織物専用機に大別し、調査対象とした14例の汎用機を7種類の型式、2例の特殊織物専用機を2種類の型式に分類した。したがって、以下では、地域的、民族的な視点から、汎用機としての地機の分類項目ごとの分布論的な傾向、汎用機としての地機の型式全般にわたる分布論的な傾向、特殊織物専用機として地機の分布論的な傾向をあきらかにする。

1) 汎用機の種類項目ごとの分布論的な傾向

汎用的な地機は、第2節で提示しているように、経糸保持具の構成型式、整経方式、開口具の設置方式、綜統固定具などの違いにもとづいて分類した。したがって、以下では、これらの分類項目ごとに、分布論的な傾向をあきらかにする。

<経糸保持具の構成型式について>

経糸保持具の構成型式では、杭・横木型（杭・紐型）を11例、横木型（紐型）を3例確認している。これらの事例を地域的に見てみると、杭・横木型（杭・紐型）は、イランで1例、ウズベキスタンで8例、中国・新疆ウイグル自治区で2例、そして、横木型（紐型）は、イランで2例、中国・新疆ウイグル自治区で1例を確認している。また、これらの事例の民族的な区分では、杭・横木型（杭・紐型）は、イラン系の民族が3例、テュルク系の民族が7例、

モンゴル系の民族が1例となる。そして、横木型（紐型）は、イラン系の民族が1例、テュルク系の民族が2例となる。なお、杭・横木型（杭・紐型）と横木型（紐型）は、イラン系の民族とテュルク系の民族の双方に見いだされるものの、個別の民族のもとで、両方の構成型式が併存している例はなく、いずれか一方の構成型式のみを確認している。（図69）

以下には、このような経糸保持具の構成型式の地域的、民族的な分布を、該当する地機のコード番号とともに列記する。

① 杭・横木型（杭・紐型）

地域：イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

タジク人【UGF-1】【UGC-4】【UGC-5】

：テュルク系

アゼルバイジャン人【IGJ-1】、ウズベク人【UGC-1】【UGJ-1】、カザフ人【UGC-6】、トルクメン人【UGC-2】【UGC-3】、カザフ人（遊牧民）【XGC-2】

：モンゴル系

モンゴル人【XGC-1】

② 横木型（紐型）

地域：イラン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

クルド人（遊牧民）【IGF-1】

：テュルク系

カシュガイ人（遊牧民）【IGF-2】、ウイグル人【XGJ-1】

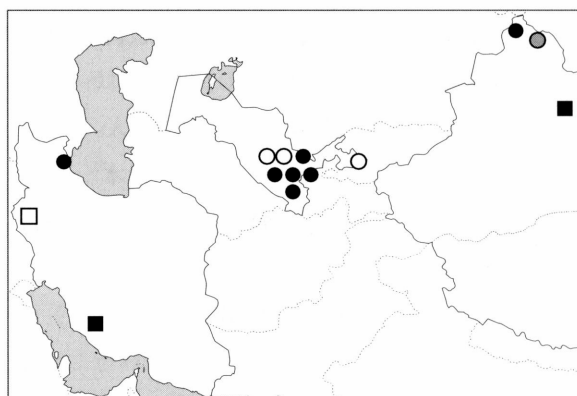


図69 経糸保持具の構成型式の分布
 <杭・横木型（杭・紐型）>
 ○-イラン系民族、●-テュルク系民族、
 ●-モンゴル系民族
 <横木型（紐型）>
 □-イラン系、■-テュルク系民族

<整経方式について>

整経方式では、平整経式を3例、輪状整経式を8例、擬似輪状整経式を3例確認している。これらの事例を地域的に見てみると、平整経式は、イランで2例、ウズベキスタンで1例、輪状整経式は、ウズベキスタンで6例、中国・新疆ウイグル自治区で2例、擬似輪状整経式は、イランで1例、ウズベキスタンで1例、中国・新疆ウイグル自治区で1例を確認している。また、これらの事例の民族的な区分では、平整経式はイラン系の民族が2例、テュルク系の民族が1例となり、輪状整経式はイラン系の民族が2例、テュルク系の民族が5例、モンゴル系の民族が1例となる。そして、擬似輪状整経式は、テュルク系が3例のみとなる。なお、平整経式と輪状整経式は、イラン系とテュルク系の双方の民族のもとで確認しており、擬似輪状整経式は、テュルク系の民族のもとでのみ確認しているが、イラン系のタジク人のもとでは、平整経式と輪状整経式、テュルク系のウズベク人のもとでは、輪状整経式と擬似輪状整経式の2種類の整経方式が存在していた。そして、その他の民族のもとでは、単一の整経方式のみを確認した。(図70)

以下には、このような整経方式の地域的、民族的な分布を、該当する地機のコード番号とともに列記する。

① 平整経式

地域：イラン、ウズベキスタン

民族：イラン系

クルト人(遊牧民)【IGF-1】 タジク人【UGF-1】

：テュルク系

カシュカイ人【IGF-2】

② 輪状整経式

地域：ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

タジク人【UGC-4】【UGC-5】

：テュルク系

ウズベク人【UGC-1】、カザフ人【UGC-6】、トルクメン人【UGC-2】【UGC-3】、カザフ人(遊牧民)

【XGC-2】

：モンゴル系

モンゴル人【XGC-1】

③ 擬似輪状整経式

地域：イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：テュルク系

アゼルバイジャン人【IGJ-1】ウズベク人【UGJ-1】、

ウイグル人【XGJ-1】

<開口具の設置方式について>

開口具の設置方式には、綜統固定・開口保持棒可動式と綜統固定・開口保持板可動式の2方式がある。

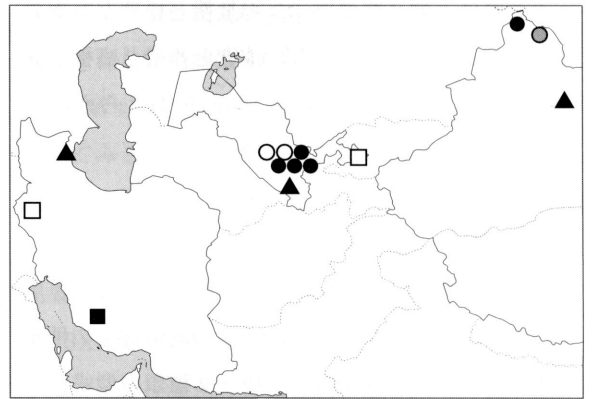


図70 整経方式の分布
 <平整経式>
 □-イラン系民族, ■-テュルク系民族
 <輪状整経式>
 ○-イラン系民族, ●-テュルク系民族,
 ●-モンゴル系民族
 <擬似輪状整経式>
 ▲-テュルク系民族

り、綜統固定・開口保持棒可動式は3例、綜統固定・開口保持板可動式は11例を確認している。これらの事例を地域的に見てみると、その分布は東西ではっきりと2分されており、綜統固定・開口保持棒可動式はイランで3例、綜統固定・開口保持板可動式はウズベキスタンで8例と中国・新疆ウイグル自治区で3例を確認している。また、これらの事例の民族的な区分では、綜統固定・開口保持棒可動式は、イラン系の民族が1例、テュルク系の民族が2例となる。また、綜統固定・開口保持板可動式は、イラン系の民族が3例、テュルク系の民族が7例、モンゴル系の民族が1例となる。なお、綜統固定・開口保持棒可動式と綜統固定・開口保持板可動式は、イラン系の民族とテュルク系の民族の双方に見いだされるものの、個別の民族のもとでは、いずれも単一の設置方式を確認している。(図71)

以下には、このような2種類の設置方式の地域的、

民族的な分布を、該当する地機のコード番号とともに列挙する。

① 綜統固定・開口保持棒可動式

地域：イラン

民族：イラン系

クルト人（遊牧民）【IGF-1】

：テュルク系

アゼルバイジャン人【IGJ-1】、カシュカイ人（遊牧民）【IGF-2】

② 綜統固定・開口保持板可動式

地域：ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

タジク人【UGF-1】【UGC-4】【UGC-5】

：テュルク系

ウズベク人【UGC-1】【UGJ-1】、ガブ人【UGC-6】、トルクメン人【UGC-2】【UGC-3】、ウイグル人【XGJ-1】、ガブ人（遊牧民）【XGC-2】

：モンゴル系

モンゴル人【XGC-1】

<綜統固定具について>

綜統固定具には、逆Y字形の綜統固定具の使用例を8例、石、木片、缶などを綜統固定具としている

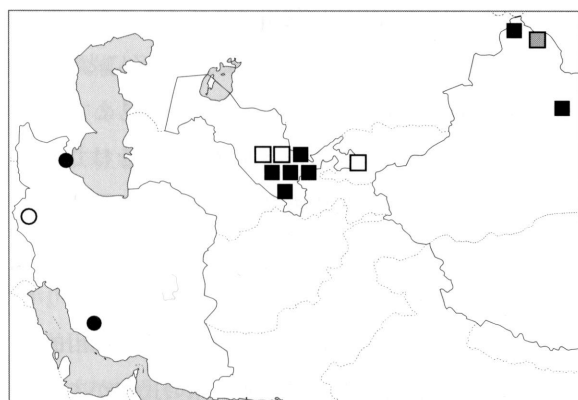


図71 開口具の設置方式の分布

<綜統固定・開口保持棒可動式>

○-イラン系民族, ●-テュルク系民族

<綜統固定・開口保持板可動式>

□-イラン系民族, ■-テュルク系民族,

■-モンゴル系民族

例を2例、三脚を綜統固定具として使用している例を3例、弓状の綜統固定具を使用している例を1例確認している。これらの事例を地域的に見てみると、逆Y字形の綜統固定具と、石、木片、缶などを使用した綜統固定具の分布は、東西ではっきりと2分さ

れている。逆Y字形の綜統固定具は、ウズベキスタンで7例と中国・新疆ウイグル自治区で1例、石、木片、缶などは、イランで3例を確認している。また、三脚は、イランで1例と中国・新疆ウイグル自治区で2例を確認している。そして、弓状の綜統固定具は、ウズベキスタンで1例を確認している。これらの事例の民族的な区分では、逆Y字形の綜統固定具は、イラン系の民族が2例、テュルク系の民族が6例、石、木片、缶などの綜統固定具は、イラン系の民族が1例、テュルク系の民族が1例となる。また、三脚は、テュルク系の民族が2例、モンゴル系の民族が1例で、弓状の綜統固定具については、テュルク系のウズベク人のもとで1例のみを確認している。なお、個々の民族のもとでは、その多くが単一種類の綜統固定具のみを使用しているが、ウズベク人のもとでは、Y字形の綜統固定具と弓状の固定具がある。ただし、一般的には、Y字形の綜統固定具が使用されており、弓状の綜統固定具は、ウズベキスタンのカイラゴチ（Qairagoch）村のウズベク人のもとでのみ確認した、他に類を見ない特異な形状の綜統固定具として位置づけられる。（図72）

以下には、このような綜統固定具の地域的、民族的な分布を、該当する地機のコード番号とともに列挙する。

① 逆Y字形の綜統固定具

地域：ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

タジク人【UGF-1】【UGC-4】【UGC-5】

：テュルク系

ウズベク人【UGC-1】、ガブ人【UGC-6】、トルクメン人【UGC-2】【UGC-3】、ウイグル人【XGJ-1】

② 石、木片、缶などの綜統固定具

地域：イラン

民族：イラン系

クルト人（遊牧民）【IGF-1】

：テュルク系

カシュカイ人（遊牧民）【IGF-2】

③ 三脚

地域：イラン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：テュルク系

アゼルバイジャン人【IGJ-1】、カザフ人（遊牧民）

【XGC-2】

：モンゴル系

モンゴル人【XGC-1】

④ 弓状の綜統固定具

地域：ウズベキスタン

民族：テュルク系

ウズベク人【UGJ-1】

2) 汎用機の分布論的な傾向

汎用的に使用されている14例の地機については、

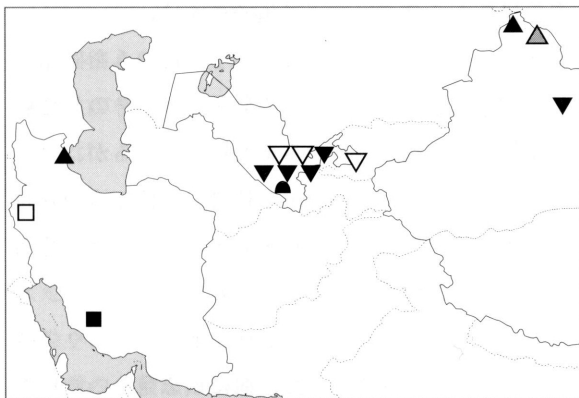


図72 綜統固定具の分布
 <逆Y字形の綜統固定具>
 ▽-イラン系民族, ▼-テュルク系民族
 <石, 木片, 缶などの綜統固定具>
 □-イラン系民族, ■-テュルク系民族
 <三脚>
 ▲-テュルク系民族, △-モンゴル系民族
 <弓状の綜統固定具>
 ▲-テュルク系民族

地域的には、イランで3例〔アゼルバイジャン人【IGJ-1】、カシュカイ人（遊牧民）【IGF-2】、クルト人（遊牧民）【IGF-1】〕、ウズベキスタンで8例〔ウズベク人【UGC-1】【UGJ-1】、カザフ人【UGC-6】、タジク人【UGF-1】【UGC-4】【UGC-5】、トルクメン人【UGC-2】【UGC-3】〕、中国・新疆ウイグル自治区で3例〔ウイグル人【XGC-3】、カザフ人（遊牧民）【XGC-2】、モンゴル人【XGC-1】〕を調査した。また、これらの事例の民族的な区分では、イラン系が4例〔クルト人（遊牧民）【IGF-1】、タジク人【UGF-1】【UGC-4】【UGC-5】〕、テュルク系が9例〔アゼルバイジャン人【IGJ-1】、カシュカイ人（遊牧民）【IGF-2】、ウズベク人【UGC-1】【UGJ-1】、カザフ人【UGC-6】、トルクメン人【UGC-2】【UGC-3】、ウイグル人【XGC-3】、カザフ人（遊牧民）【XGC-2】〕、モンゴル系が1例〔モンゴル人【XGC-1】〕である。した

がって、調査した事例数のうえでは、地域的にはウズベキスタン、民族的にはテュルク系の民族が主体を構成している。

一方、これらの汎用機を7種類に分類した型式ごとと見てみると、地域的にはイランで2型式(B1STJ型、B2SBF型)、ウズベキスタンで3型式(G1BYF型、G1BYC型、G1BUJ型)、中国・新疆ウイグル自治区で2型式(G1BTC型、G2SYJ型)を確認している。そして、民族的な区分では、イラン系の民族のもとで3型式(G1BYF型、G1BYC型、G2SBF型)、テュルク系の民族のもとで6型式(G1BYC型、G1BTC型、G1BUJ型、G1STJ型、G2SBF型、G2SYJ型)、モンゴル系の民族のもとで1型式(G1BTC型)となる。また、これらのうちでは、個々の型式が2カ国、あるいは3カ国にまたがって分布しているという例は認められないが、G1BYC型とG2SBF型は、イラン系とテュルク系の民族の双方で確認しており、G1BTC型は、テュルク系とモンゴル系の民族の双方で確認している。さらに、イラン系のみ認められる汎用機の型式は、G1BYF型が1型式あるに過ぎないが、テュルク系のみ認められる型式としては、G1BUJ型、G1STJ型、G2SYJ型の3型式がある。以上のように、汎用的に使用されてきた地機の地域的、民族的な分布は、かなり錯綜していることから、地機の分布論的な傾向もはっきりとは見えてこない。ただし、ウズベク人やトルクメン人をはじめとするテュルク系の民族のもとに、7種類の型式うちの6種類の型式が存在していることや、テュルク系のみ認められる型式がイラン系の1型式よりも多い3型式であることは、事例数のうえで汎用的な地機の使用民族として、テュルク系の民族が主体を構成していることと同様に、テュルク系の民族が地機の主要な担い手を構成してきた民族であったことを示唆しているといえる。

なお、経糸保持具の構成型式の違いは、地機の外観に大きく反映しており、地機の型式分類では上位の分類概念に規定している。こうしたことから、経糸保持具が杭と横木で構成される、G1BYF型、G1BYC型、G1BTC型、G1BUJ型、G1STJ型などのG1系の地機の型式と、経糸保持具が2本の横木で

構成される、G2SBF型、G2SYJ型などのG2系の地機の型式は、シルクロードの地機を代表する型式群として位置づけられる。ただし、その分布は、かなり錯綜しており、イランではG1系の地機がテュルク系の民族のもとで使用されており、経糸保持具が2本の横木で構成されるG2系の地機は、イラン系とテュルク系の民族のもとで使用されている。また、ウズベキスタンでは、すべてがG1系の地機であり、それらはイラン系とテュルク系の双方の民族のもとで使用されている。そしてさらに、中国・新疆ウイグル自治区では、G1系の地機がテュルク系とモンゴル系の民族のもとで使用され、G2系の地機がテュルク系の民族のもとで使用されている。このように、G1系の地機とG2系の地機の地域的、民族的な分布状況は、かなり入り組んでいるが、G1系とG2系の地機の型式が、歴史的に関係しないままに成立し、今日に至っているということは、ありえないものの、現時点では、相互の系統論的な関係については、まったく不明である。

ただし、このような地機の錯綜した分布傾向のなかでは、モンゴル系の民族として、モンゴル人（遊牧民）のもとでG1BTC型の地機を1例【XGC-1】のみ確認しており、このようなモンゴル人の地機と、その機織り技術については、カザフ人からの影響によるものと考えられる。このことについては、モンゴルに住むモンゴル人のもとでは、地機を使用した機織りが例外的に西部地域で認められるのみであること、調査対象としたモンゴル人（遊牧民）の地機が、近接地域で遊牧をおこなっているテュルク系のカザフ人（遊牧民）の地機【XGC-2】とおなじG1BTC型であり、織物の繊維素材としての羊毛、織技法としての経糸浮織（昼夜織）も共通していることなどによっている。

3) 特殊織物専用機の分布論的な傾向

特殊織物専用の地機としては、むしろ織り専用のG2XXF型【IGF-3】と、細紐織り専用のGXSFF型【UGF-2】がある。これらの特殊織物専用機は、すでに述べているように、いずれも他の地機とは大きく異なった構造の地機である。しかし、今回の調査

では、それぞれ1例ずつの事例しか確認できていないため、これらの、イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区という、調査地域における分布論的な傾向についてはいっさい不明である。ただし、G2XXF型については、アシを素材としたむしろを織る地機であり、今回のこの地機の調査地もカスピ海沿岸であったことを考えるならば、このむしろ織り専用の地機は、カスピ海をはじめとする水の豊富なアシの群生地域において、使用されてきたことは間違いないであろう。また、類似のむしろ織り用の地機は、インドからアラブ地域にかけて、分布していることから、この地機の型式は、それらとの影響関係をもつと見られる。一方、GXSFF型については、G2XXF型とは異なり、開口具として輪状綜統と開口保持棒をそなえている。しかし、すべての汎用的な地機の綜統の設置方式が固定式であるものの、この型式のみが可動式であることは、分布論的には、きわめて不自然である。したがって、この型式については、その分布がいかなるものか、細紐を織るための地機として、古くから存在していたものか、あるいは、比較的新しい時期に導入されたものかなど、今後に残された課題は多い。

2 枠機

枠機は、第2節において、整経方式、開口具の基本構成型式、輪状綜統型経糸整列具の有無などの違いにもとづいて、11種類の型式に分類した。したがって、以下では、地域的、民族的な視点から、これらの分類項目ごとの分布論的な傾向、および、枠機の型式全般にわたる分布論的な傾向をあきらかにする。

1) 枠機の分類項目ごとの分布論的な傾向

<機枠の設置方式について>

機枠の設置方式には、水平式、垂直式、傾斜式の3方式があるが、第2節において、すでに述べているように、枠機の型式分類をおこなううえでは、便宜的に垂直式と傾斜式は、一括して垂直・傾斜式とし、枠機の型式分類では、機枠の設置方式を、水平式と垂直・傾斜式の2方式とした。このような機枠

の設置方式のうち、水平式は8例、垂直・傾斜式は22例を確認している。これらの事例を地域的に見ると、水平式は、イランで3例、ウズベキスタンで5例、垂直・傾斜式は、イランで16例、ウズベキスタンで3例、中国・新疆ウイグル自治区で3例を確認している。また、これらの事例の民族的な区分では、水平式は、イラン系の民族が1例、テュルク系の民族が7例、垂直・傾斜式は、イラン系の民族が12例、テュルク系の民族が10例となる。なお、水平式と垂直・傾斜式は、イラン系の民族とテュルク系の民族の双方に見いだされるが、イラン系のクルド人、テュルク系のトルクメン人とウズベク人のもとでは、水平式と垂直・傾斜式の両型式を確認している。(図73)

以下には、このような機枠の設置方式の地域的、民族的な分布を、該当する枠機のコード番号とともに列記する。

機枠の使用はイラン系とテュルク系の民族のもとで確認しており、イラン系とテュルク系の民族のうちには、水平式と垂直・傾斜式のいずれの設置方式も見いだされる。以下には、機枠の設置方式ごとの地域的、民族的な分布を記す。

① 水平式

地域：イラン、ウズベキスタン

民族：イラン系

クルド人(遊牧民)【IFF-2】

：テュルク系

カシュカイ人【IFF-1】、トルクメン人【IFF-3】【UFF-1】、

ウズベク人【UFF-2】【UFF-3】【UFF-4】、カザフ人

【UFF-5】

② 垂直・傾斜式

地域：イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

ペルシア人【IFF-5】【IFF-6】【IFF-7】【IFF-8】

【IFC-3】【IFC-4】【IFC-7】、クルド人【IFC-9】

【IFJ-1】、列シ人【IFC-1】、ハフチアリ人【IFJ-2】、

ロル人【IFC-8】、タジク人【UFC-2】

：テュルク系

アゼルバイジャン人【IFF-4】【IFC-2】【IFC-5】、ウ

ズベク人【UFC-1】【UFC-3】、トルクメン人【IFC-

6】、ウイグル人【XFJ-1】【XFJ-2】【XFJ-3】

<整経方式について>

機枠の整経方式では、平整経式を13例、輪状整経式を12例、擬似輪状整経式を5例確認している。こ

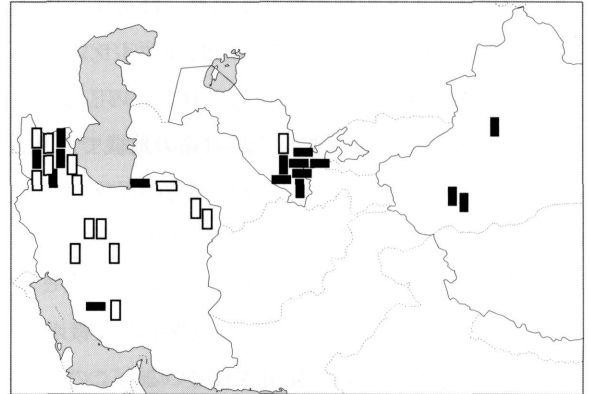


図73 機枠の設置方式の分布

<水平式>

□-イラン系民族, ■-テュルク系民族

<垂直・傾斜式>

□-イラン系民族, ■-テュルク系民族

これらの分布は、地域的には、平整経式と輪状整経式をイランとウズベキスタン、擬似輪状整経式をイランと中国・新疆ウイグル自治区で確認している。また、民族的には、機枠の使用はイラン系とテュルク系の民族のもとで確認しており、イラン系とテュルク系の民族のうちには、平整経式と輪状整経式と擬似輪状整経式のすべての整経方式が見いだされる。(図74)

(図74)

以下には、整経方式ごとの地域的、民族的な分布を記す。

① 平整経式

地域：イラン、ウズベキスタン

民族：イラン系

ペルシア人【IFF-5】【IFF-6】【IFF-7】【IFF-8】、

クルド人(遊牧民)【IFF-2】

：テュルク系

アゼルバイジャン人【IFF-4】、カシュカイ人【IFF-1】、

トルクメン人【IFF-3】【UFF-1】、ウズベク人

【UFF-2】【UFF-3】【UFF-4】、カザフ人

【UFF-5】

② 輪状整経式

地域：イラン、ウズベキスタン

民族：イラン系

ペルシア人【IFC-3】【IFC-4】【IFC-7】、クルド人【IFC-9】、列シ人【IFC-1】、ロル人【IFC-8】、タジク人【UFC-2】

：テュルク系

アゼルバイジャン人【IFC-2】【IFC-5】、トルクメン人【IFC-6】、ウズベク人【UFC-1】【UFC-3】

③ 擬似輪状整経式

地域：イラン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

クルド人【IFJ-1】、ハフナリ人【IFJ-2】

：テュルク系

ウイグル人【XFJ-1】【XFJ-2】【XFJ-3】

なお、イラン系の民族のうち、ペルシア人のもとでは、平整経式と輪状整経式の2種類の整経方式、クルド人のもとでは、平整経式と輪状整経式と擬似輪状整経式の3種類の整経方式を確認している。また、テュルク系の民族のうちでも、アゼルバイジャン人とトルクメン人とウイグル人のもとでは、平整経式と輪状整経式の2種類の整経方式を確認している。そして、上記の民族以外では、単一の整経方式のみを確認している。今回の調査では、平整経式の地機はイランでクルド人遊牧民とカシュカイ人遊牧民の2例【IGF-1】【IGF-2】、ウズベキスタンでタジク人の1例【UGF-1】を確認したのみである。また、輪状整経式と擬似輪状整経式の整経方式の地機については、遊牧民による使用例を確認していない。したがって、これらのことから、遊牧民の機織りにおいては、経糸を張りわたすスペースについて、一般にほとんど制約がないために、整経方式として平整経式を採用してきたという可能性も考えることができる。

<開口具の基本構成型式について>

開口具の基本構成型式では、単式輪状綜統型を10例、複合単式輪状綜統型を5例、無綜統型を15例確認している。これらの事例を地域的に見てみると、単式輪状綜統型は、イランで7例、ウズベキスタンで3例、複合単式輪状綜統型は、イランで2例、中国・新疆ウイグル自治区で3例、無綜統型は、イランで10例、ウズベキスタンで5例を確認している。また、これらの事例の民族的な区分では、単式輪状

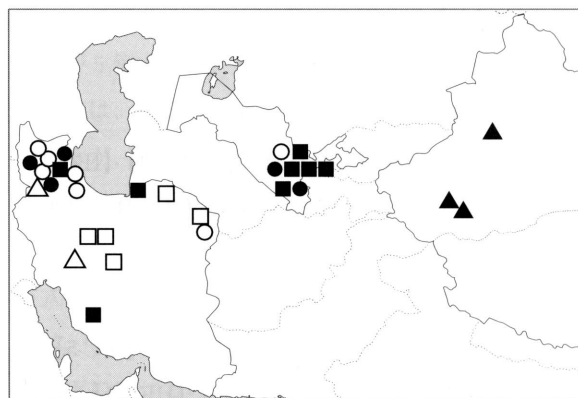


図74 整経方式の分布

<平整経>

□ - イラン系民族, ■ - テュルク系民族

<輪状整経>

○ - イラン系民族, ● - テュルク系民族

<擬似輪状整経>

△ - イラン系民族, ▲ - テュルク系民族

綜統型は、イラン系が4例、テュルク系が6例、複合単式輪状綜統型は、イラン系が2例、テュルク系が3例、無綜統型は、イラン系が8例、テュルク系が7例となる。なお、これらの開口具の基本構成型式では、イラン系とテュルク系の民族は、いずれの型式にも認められるが、イラン系のペルシア人のもとでは、3種類の型式のすべてを確認しており、クルド人のもとでは、単式輪状綜統型と無綜統型を確認している。また、テュルク系のトルクメン人とウズベク人のもとでも単式輪状綜統型と無綜統型を確認している。(図75)

以下には、このような経糸保持具の構成型式の地域的、民族的な分布を、該当する地機のコード番号とともに列記する。

① 単式輪状綜統型

地域：イラン、ウズベキスタン

民族：イラン系

ペルシア人【IFF-5】、クルド人【IFJ-1】、クルド人(遊牧民)【IFF-2】、列シ人【IFC-1】

：テュルク系

カシュカイ人【IFF-1】、トルクメン人【IFF-3】【IFC-6】

② 複合単式輪状綜統型

地域：イラン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

ペルシア人【IFF-7】【IFF-8】

：テュルク系

ウイグル人【XFJ-1】【XFJ-2】【XFJ-3】

③ 無綜統型

地域：イラン、ウズベキスタン

民族：イラン系

ペルシア人【IFF-6】【IFC-3】【IFC-4】【IFC-7】、
クルト人【IFC-9】、ハフチアリ人【IFJ-2】、ロル人
【IFC-8】、タジク人【UFC-2】

：テュルク系

アゼルバイジャン人【IFF-4】【IFC-2】【IFC-5】、ウ
ズベク人【UFF-3】【UFF-4】【UFC-1】、トルク
メン人【UFF-1】

<経系整理具について>

外観が輪状綜統と共通する輪状綜統型経系整理具
については、5例を確認している。これらの事例を

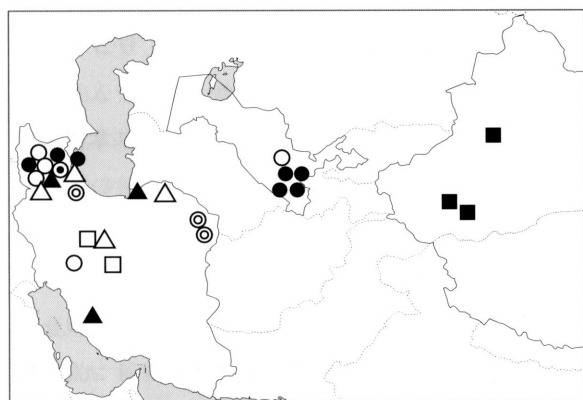


図75 開口具の基本構成型式の分布

- <単式輪状綜統型>
- △ - イラン系民族, ▲ - テュルク系民族
- <複合単式輪状綜統型>
- - イラン系民族, ■ - テュルク系民族
- <無綜統型-経系整理具がない型式>
- - イラン系民族, ● - テュルク系民族
- <無綜統型-経系整理具がある型式>
- ◎ - イラン系民族, ⊙ - テュルク系民族

地域的に見てみると、すべてはイランで確認している。また、また、これらの事例を民族的に区分してみると、イラン系の民族が3例、テュルク系の民族が1例である。(図75参照)

以下には、このような輪状綜統型経系整理具の地域的、民族的な分布を、該当する高機のコード番号とともに列記する。

地域：イラン

民族：イラン系

ペルシア人【IFF-6】【IFC-7】、ロル人【IFC-8】

：テュルク系

アゼルバイジャン人【IFF-4】

2) 梓機の分布論的な傾向

梓機については、イランで19例〔ペルシア人【IFF-5】
【IFF-6】【IFF-7】【IFF-8】【IFC-3】【IFC-4】【IFC-7】、
アゼルバイジャン人【IFF-4】【IFC-2】【IFC-5】、カシュカイ人、
【IFF-1】、クルト人【IFC-9】【IFJ-1】、クルト人（遊牧民）
【IFF-2】、タリシ人【IFC-1】、トルクメン人【IFF-3】
【IFC-6】、ハフチアリ人【IFJ-2】、ロル人【IFC-8】〕、ウズ
ベキスタンで8例〔ウズベク人【UFF-2】【UFF-3】
【UFF-4】【UFC-1】【UFC-3】、ガフ人【UFF-5】、タ
ジク人【UFC-2】、トルクメン人【UFF-1】〕、中国・新疆
ウイグル自治区で3例〔ウイグル人【XGJ-1】【XGJ-2】
【XGJ-3】〕を調査した。また、これらの総計30例の
事例の民族的な区分では、イラン系が14例〔ペルシア
人【IFF-5】【IFF-6】【IFF-7】【IFF-8】【IFC-3】
【IFC-4】【IFC-7】、クルト人【IFC-9】【IFJ-1】、クルト
人（遊牧民）【IFF-2】、タジク人【UFC-2】、タリシ人
【IFC-1】、ハフチアリ人【IFJ-2】、ロル人【IFC-8】〕、テュ
ルク系が16例〔アゼルバイジャン人【IFF-4】【IFC-2】
【IFC-5】、カシュカイ人、【IFF-1】、トルクメン人【IFF-3】
【IFC-6】【UFF-1】、ウズベク人【UFF-2】【UFF-3】
【UFF-4】【UFC-1】【UFC-3】、ガフ人【UFF-5】、ウ
イグル人【XGJ-1】【XGJ-2】【XGJ-3】〕である。したが
って、調査の事例数のうえでは、地域的にはイラン
でほぼ6割にあたる調査をおこなったが、民族的
にはイラン系とテュルク系は、ほぼ半々であった。

一方、これらを11種類に分類した型式ごとに見て
みると、地域的には、イランでは9型式（FHFFS
型、FVFFZ型、FVFFS型、FVFWW型、FVFCX
型、FVFCZ型、FVFC型、FVFJZ型FVFJS型）、
ウズベキスタンでは4型式（FHFFX型、FHFFS型、
FVFCX型、FVFC型）、中国・新疆ウイグル自治
区では1型式（FVFJW型）を確認している。そし
て、民族的な区分では、イラン系の民族のもとで9
型式（FHFFS型、FVFFZ型、FVFFS型、
FVFWW型、FVFCX型、FVFCZ型、FVFC型、
FVFJZ型、FVFJS型）、テュルク系の民族のもとで
6型式（FHFFX型、FHFFS型、FVFFZ型、
FVFCX型、FVFC型、FVFJW型）となる。また、
これらのうちでは、FHFFS型、FVFCX型、

FVFFCS型の3型式は、地域的にはイランとウズベキスタンの双方で確認しており、民族的にもイラン系とテュルク系の双方で確認している。さらに、イラン系のみ認められる枠機の型式としては、FVFFS型、FVFWF型、FVFJZ型、FVFJS型の4型式が存在しているのに対して、テュルク系のみ認められる型式は、FHFFX型とFVFJW型の2型式である。

以上のように、枠機の型式は、地域的にはイラン、そして、民族的にはイラン系の民族に偏った分布状況が認められる。したがって、こうしたことから、枠機は、ウズベキスタンや中国・新疆ウイグル自治区、あるいは、テュルク系の民族よりも、イラン、および、イラン系の民族のもとで、多様な展開を遂げてきたことがうかがわれる。なお、パイル織カーペットを織るための枠機の使用民族ごとの型式を、構造・機能論的な傾向として指摘した11例の移行傾向とかさねあわせて見るならば、イラン系のペルシア人のもとでは、FVFFS型からFVFFZ型、FVFFZ型からFVFCZ型、また、テュルク系のウズベク人のもとでは、FHFFS型からFHFFX型、FHFFX型からFVFCX型、トルクメン人のもとでは、FHFFS型からFVFCX型という、5例の移行傾向が浮かびあがってくる。

3 高機

高機は、第2節において、経糸の保持方式、経糸保持具の構成型式、緯打補助具としての腕木の有無、緯打補助具としての飛籽装置の有無などによって、8種類の型式に分類した。したがって、以下では、地域的、民族的な視点にもとづいて、これらの分類項目ごとの分布論的な傾向、および、高機の型式全般にわたる分布論的な傾向をあきらかにする。

1) 高機の分類項目ごとの分布論的な傾向

<経糸の保持方式について>

経糸の保持方式には、固定式と垂下式の2方式があり、固定式は3例、垂下式は16例を確認している。これらの事例を地域的に見てみると、固定式の3例はイランでのみ確認しており、垂下式はイランが5

例、ウズベキスタンが6例、中国・新疆ウイグル自治区が5例である。また、これらの事例の民族的な区分では、固定式の3例は、すべてイラン系の民族であるが、垂下式はイラン系の民族が5例、テュルク系の民族が11例となる。なお、これらの事例では、イラン系の民族のもとでのみ固定式と垂下式の保持方式が存在しており、イラン系のペルシア人のもとでは、双方の保持方式を確認している。(図76)

以下には、このような固定式と垂下式の経糸保持方式の地域的、民族的な分布を、該当する高機のコード番号とともに列記する。

① 固定式

地域：イラン

民族：イラン系

ペルシア人【ITF-5】【ITF-8】、クリシュ人【ITF-1】

② 垂下式

地域：イラン、ウズベキスタン、中国、新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

ペルシア人【ITF-2】【ITF-3】【ITF-4】【ITF-6】【ITF-7】

：テュルク系

ウズベク人【UTF-1】【UTF-2】【UTF-3】【UTF-4】【UTF-5】【UTF-6】、ウイグル人【XTF-1】【XTF-2】【XTF-3】【XTF】【XTF5】

<経糸保持具の構成型式について>

経糸保持具の構成型式には、経糸保持棒と布巻き棒による構成型式、経巻き棒と布巻き棒による構成型式、錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒による構成型式、経糸保持棒と布巻き棒の双方に錘りが付属した構成型式の4型式があり、経糸保持棒と布巻き棒による構成型式は2例、経巻き棒と布巻き棒による構成型式は1例、錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒による構成型式は14例、経糸保持棒と布巻き棒の双方に錘りが付属した構成型式は2例を確認している。これらの事例を地域的に見てみると、経糸保持棒と布巻き棒による構成型式の2例は、イランでのみ確認しており、経巻き棒と布巻き棒による構成型式の1例もイランで確認している。また、錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒による構成型式は、イランで5例、ウズベキスタンで4例、中

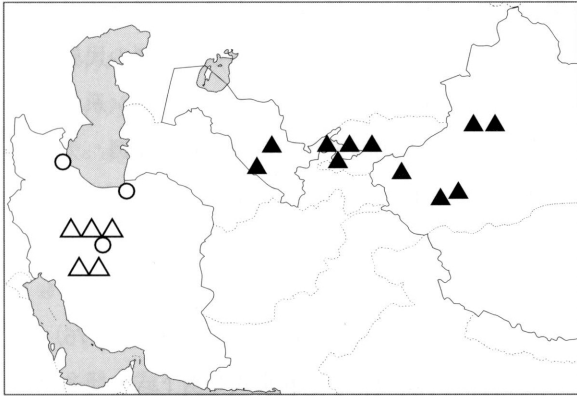


図76 経糸保持方式の分布
 <固定式>
 ○-イラン系民族
 <垂下式>
 △-イラン系民族, ▲-テュルク系民族

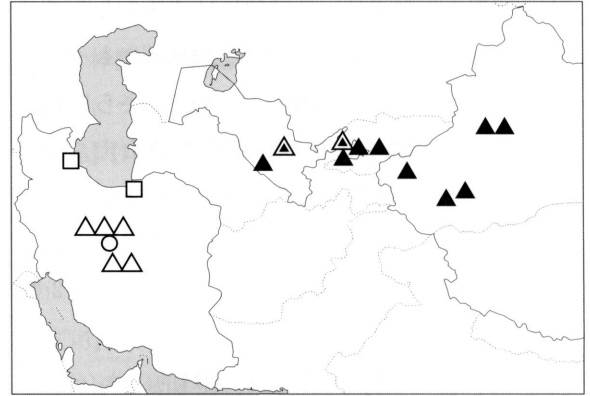


図77 経糸保持具構成型式の分布
 <経糸保持棒と布巻き棒>
 □-イラン系民族
 <経巻棒と布巻棒>
 ○-イラン系民族
 <錘り付属経巻棒と布巻棒>
 △-イラン系民族, ▲-テュルク系民族
 <錘り付属経糸保持棒と錘り付属布巻き棒>
 ▲-テュルク系民族

国・新疆ウイグル自治区で2例を確認している。そして、経糸保持棒と布巻き棒の双方に錘りが付属した構成型式の2例は、ウズベキスタンで確認している。また、これらの事例の民族的な区分では、経糸保持棒と布巻き棒による構成型式は、イラン系が2例、経巻棒と布巻き棒による構成型式は、イラン系が1例で、これらの構成型式は、いずれもイラン系の民族のみである。また、錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒による構成型式は、イラン系の民族が5例、テュルク系の民族が11例を確認している。なお、イラン系のペルシア人のもとでは、経糸保持棒と布巻き棒による構成型式、経巻棒と布巻き棒による構成型式、錘りの付属した経糸保持棒と、による構成型式の3型式を確認しており、テュルク系のウズベク人のもとでは、錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒による構成型式と、経糸保持棒と布巻き棒の双方に錘りの付属した構成型式の2型式を確認している。(図77)

以下には、このような経糸保持具の構成型式の地域的、民族的な分布を該当する高機の使用民族名とコード番号とともに列記する。

① 経糸保持棒と布巻き棒

地域：イラン

民族：イラン系

ペルシア人【ITF-8】、列シ人【ITF-1】

② 経巻棒と布巻き棒

地域：イラン

民族：イラン系

ペルシア人【ITF-5】

③ 錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒

地域：イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

ペルシア人【ITF-2】【ITF-3】【ITF-4】【ITF-6】【ITF-7】

：テュルク系

ウズベク人【UTF-3】【UTF-4】【UTF-5】【UTF-6】

ウイグル人【XTF-1】【XTF-2】【XTF-3】【XTF-4】

【XTF-5】

④ 経糸保持棒と布巻き棒の双方に錘りが付属

地域：ウズベキスタン

民族：テュルク系

ウズベク人【UTF-1】【UTF-2】

<腕木について>

緯打補助具としての腕木の使用例については、8例を確認している。これらの事例を、調査対象とした高機の総数との比較で地域的に見てみると、イランでは8例中の1例、ウズベキスタンで6例中の2例が腕木をそなえた高機で、中国・新疆ウイグル自治区では5例の高機すべてに腕木を確認している。また、これらの事例を民族的に区分してみると、イラン系の民族が1例、テュルク系の民族が7例となる。なお、こうした腕木の存在は、調査対象とした高機の使用民族であるイラン系のペルシア人、テュ

ルク系のウズベク人とウイグル人のもとで確認しているが、ペルシア人の高機の事例では8例中1例、ウズベク人の高機の事例では、6例中2例に腕木がそなわっており、ウイグル人の高機の事例では5例すべてに腕木を確認している。(図78)

以下には、このような腕木の地域的、民族的な分布を、該当する高機のコード番号とともに列記する。

地域：イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区

民族：イラン系

列シ人【ITF-1】

：テュルク系

ウズベク人【UTF-1】【UTF-6】、ウイグル人【XTF-1】
【XTF-2】【XTF-3】【XTF-4】【XTF-5】

<飛籽装置について>

織入補助具としての飛籽装置の使用例については、4例を確認している。これらの事例を地域的に

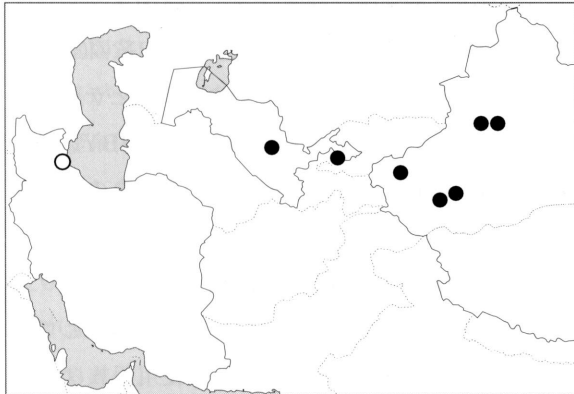


図78 腕木の分布
○-イラン系民族、●-テュルク系民族

見てみると、すべてはウズベキスタンで確認している。また、民族的には、それらの使用民族は、すべてがテュルク系のウズベク人である。(図79)

以下には、このような飛籽装置の地域的、民族的な分布を、該当する高機のコード番号とともに列記する。

地域：ウズベキスタン

民族：テュルク系

ウズベク人【UTF-2】【UTF-3】【UTF-4】【UTF-5】

2) 高機の分布論的な傾向

高機については、イランで8例〔パルシア人【ITF-2】【ITF-3】【ITF-4】【ITF-5】【ITF-6】【ITF-7】

【ITF-8】、列シ人【ITF-1】〕、ウズベキスタンで6例〔ウズベク人【UTF-1】【UTF-2】【UTF-3】【UTF-4】【UTF-5】【UTF-6】〕例、中国・新疆ウイグル自治区で5例〔ウイグル人【XTF-1】【XTF-2】【XTF-3】【XTF-4】【XTF-5】〕の合計19例を調査した。また、これらの総計19例の事例の民族的な区分では、イラン系が8例〔パルシア人【ITF-2】【ITF-3】【ITF-4】【ITF-5】【ITF-6】【ITF-7】【ITF-8】、列シ人【ITF-1】〕、テュルク系が11例〔【UTF-1】【UTF-2】【UTF-3】【UTF-4】【UTF-5】【UTF-6】、ウイグル人【XTF-1】【XTF-2】【XTF-3】【XTF-4】【XTF-5】〕である。したがって、調査の事例数のうへでは、地域的には、イランがもっとも多く、中国・新疆ウイグル自治区が最も少ないが、その差は3例でしかなく、イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区の地域差はほとんどない。そして、民族的にも、イラン系とテュルク系の差は3例でしかなく、大差はない。

一方、これらを8種類に分類した型式ごとに見てみると、地域的には、イランでは4型式(TF1XX型、TF1AX型、TF2XX型、TW3XX型)、ウズベキスタンでは4型式(TW3AX型、TW3XF型、TW4XF型、TW4AX型)、中国・新疆ウイグル自治区では1型式(TW3AX型)を確認している。そして、民族的な区分では、イラン系の民族のもとで4型式(TF1XX型、TF1AX型、TF2XX型、TW3XX型)、テュルク系の民族のもとで4型式(TW3AX型、TW3XF型、TW4XF型、TW4AX型)となる。したがって、このような型式ごとの地域的、民族的な分布状況は、事例数の地域的、民族的な分布状況とほぼ一致している。

ただし、高機は、イランではイラン系の民族が使用しており、ウズベキスタンと中国・新疆ウイグル自治区ではテュルク系の民族が使用している。そして、使用民族としては、イラン系の民族では、8例のうち7例がペルシア人で、ウズベキスタンでは、6例のすべてがウズベク人、中国・新疆ウイグル自治区でも5例のすべてがウイグル人であり、これらの民族は、いずれもイラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区のもっとも大きな民族集団

である。したがって、こうした地域的、民族的な分布状況からは、高機が、それぞれの地域の最大の民族によって、おもに使用されてきたという傾向があまり明らかとなっている。

また、高機の型式を経糸の保持方式について見てみると、TF1XX型、TF1AX型、TF2XX型など、固定式のTF系の型式は、いずれもイラン系民族のみが、平織組織の織物を織る高機として使用している。そして、垂下式のTW系の型式は、イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区のいずれにおいても認められるが、イラン系民族のペルシア人が、唯一、TW3XX型のみを使用しており、この型式の高機では、もっぱら、ピロード、緯錦、無地の綾織、格子縞と経緋の併用織物、および、木綿を繊維素材とした二重織の紋織物など、一般に高級織物として位置づけられる織物を織っている。一方、その他のTW系のTW3AX型、TW3XF型、TW4XF型、TW4AX型は、すべてウズベキスタンと中国・新疆ウイグル自治区のテュルク系のウズベク人とウイグル人が使用しており、これらの高機では、平織組織の白無地の布や経緋、緯畝組織の綴、縞子織組織の経緋などが織られている。

したがって、以上のことから、高機の8種類の型式は、織物の種類と地域的民族的な違いによって、TF系の3型式(TF1XX型、TF1AX型、TF2XX型)、TW系の1型式(TW3XX型)、TW系の4型式(TW3AX型、TW3XF型、TW4XF型、TW4AX型)という、3グループに大別することができる。

5. 結びにかえて

本稿では、イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区での調査資料にもとづいて、地機と杵機と高機という、シルクロードで使用されている主要な織機について、構造・機能論的な視点から型式分類をおこなった。そしてさらに、それらの型式のうちに認められる構造・機能論的、分布論的な分析をおこない、地機、杵機、高機の特徴、および、それらのうちに見いだされる個々の型式の特徴や型式相互の関係についても若干の指摘をおこなった。

以下では、それらの要約とともに、地機、杵機、高機の相互の関係についても、簡単に記して結びにかえることとする。

地機は、汎用機を7型式、特殊織物専用機を2型式に分類した。このうち、汎用機については、開口具の設置方式が綜統固定・開口保持具可動(綜統固定・開口保持棒可動式と綜統固定・開口保持板可動式)という、日本には例のない設置方式を特徴としている。そうした汎用機は、経糸保持具の構成型式が杭・横木型(杭・紐型)のG1系の型式と、横木型(紐型)のG2系の型式に大別することができる。そして、それらのうちでは、とくにG1系のGIBYC型がもっとも事例数が多く、その地域的な分布はウズベキスタンに集中している。また、使用民族としては、テュルク系のウズベク人、カザフ人、トルクメン人とともに、イラン系のタジク人も確認している。さらに、その他の型式では、いずれも事例数は1例か2例を確認しているにすぎず、G2系のG2SBF型のみ、使用民族がイラン系のクルド人とテュルク系のカシュカイ人である。そして、GIBYC型とG2SBF型以外の地機のうち、GIBTC型をのぞく型式は、いずれの使用民族についても、イラン系とテュルク系の双方の民族を確認した例はなく、イラン系とテュルク系の民族のどちらか一方を確認しているのみである。なお、GIBTC型の使用民族は、テュルク系のカザフ人とモンゴル系のモンゴル人であり、この型式は、モンゴル人の地機の使用例として唯一のものである。したがって、イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区における地機は、G1系とG2系という2種類の型式群に大別され、イラン系とテュルク系の民族がおもな使用民族として位置づけられる。ただし、経糸保持具の構成型式において、きわだった違いがあるG1系とG2系の地機の地域的、民族的な分布状況は、かなり錯綜している。したがって、G1系とG2系の地機が歴史的に関係しないままに、今日に至っているとは考えられないものの、現時点では、それらのあいだの系統論的な関係は、まったく不明である。また、特殊織物専用機の2型式については、いずれも1例ずつしか確認できていないことから、多くは語れない。ただし、と

くに細紐を織るための専用のGXSFF型については、開口具の設置方式が、地機のなかで、唯一の輪状綜統・開口保持具可動式であるという例外的な型式である。したがって、この型式の地機は、サイズにおいては、今回の調査報告のなかではもっとも小さいものではあるが、その存在が内包している問題はきわめて大きいといえる。

枠機は、地機や高機とともに、シルクロードにおいて普遍的に使用されている主要な織機である。ただし、枠機で織られている織物は、ほとんどすべてがカーペットであることから、枠機は、地機の特殊織物専用の2型式と同様に、特殊織物専用機として位置づけられる。そうした枠機は11型式に分類した。それらの枠機の開口具の基本構成型式には、単式輪状綜統型、複合単式輪状綜統型、無綜統型の3型式が見いだされるが、単式輪状綜統型の枠機については、開口具の設置方式が地機の汎用機と共通する輪状綜統固定・開口保持具可動式である。また、経糸保持具が2本の経糸保持棒（横木）で構成される地機の経糸保持棒の両端に2本の棒をわたして四角形の枠としてしまえば、構造的には、機枠の設置方式が水平式の枠機とまったく変わるところはない。したがって、こうしたことから、枠機は基本的には地機がカーペット専用機として発展した織機であると考えられる。また、この点については、枠機のうちにも、機枠の設置方式が水平式から垂直式や傾斜式へ移行してきたという傾向があることも関連しており、原初的な枠機の機枠の設置方式は水平式であったことも間違いないと考えられる。なお、今回の枠機の調査で、もっとも驚いたことは、大半の枠機で織られていたパイル織のカーペットの地組織である。この地組織は、平織の変化組織であるが、2層の経糸に太い緯糸と細い緯糸をあたかも立体交差させるように組織している。そして、太い緯糸と細い緯糸という2種類の緯糸を使用することによって、綜統が必要でなくなるという、一般的な機織りの現場では考えられない状況を生みだしており、こうしたことも、枠機が特殊織物専用機として位置づけられる織機であることと、深く関係していると考えられる。

高機は、8型式に分類した。それらのうちでもっとも普遍的なものは、経糸の保持方式が垂下式のTW系の型式（TW3XX型、TW3AX型、TW3XF型、TW4XF型、TW4AX型）であり、これらはシルクロードの高機を代表する型式として位置づけられる。なお、経糸の保持方式が垂下式であるということは、具体的には経糸の張力が錘りによって調整されていることであり、このような経糸の保持方式をそなえたTW系の高機では、平織組織、綾織組織、縹子織組織、紋織組織などのありとあらゆる織物が織られていた。一方、経糸の保持方式が固定式のTF系の型式（TF1XX型、TF1AX型、TF2XX型）は、イランにおいてのみ確認している。それらの高機では、いずれも平織組織の無地布や格子縞の織物のみを織っていたが、こうしたTF系の型式の高機については、おそらくは比較的あたらしい時代に導入されたものと見られ、イランにおいても、伝統的には、もっぱらTW系の高機が使用されてきたと考えられる。なお、TW系の高機の特徴となっている経糸の垂下式の保持方式については、第3節で指摘しているように、紀元前からヨーロッパで使用されてきた錘り機の影響によって出現した可能性が大きい。高機本来の経糸の保持方式は固定式であったと見られる。また、そうした高機は、中国において完成した織機である可能性が大きい。したがって、これらのことが事実であるとするならば、シルクロードにおける経糸の保持方式が垂下式のTW系の高機は、中国とヨーロッパという東西の機織り文化の融合によって成立した型式であるといえる。また、高機がシルクロードに出現する以前には、地機と枠機がシルクロードにおける主要な織機であったことは間違いないと見られる。

以上では、本稿の要約とともに、地機と枠機と高機の相互の関係についても若干の指摘をおこなった。ただし、本稿の調査報告においては、織機に関する調査資料のすべてを網羅したわけではなく、地機、枠機、高機の個々の事例ごとの各部名称や、機織り技術によってつくられている投石紐に関する資料などについては、いまだ手つかずのままであり、これらについては、別の機会にあらためて研究成果

の報告をおこなう予定である。また、本稿の執筆にあたっては、基本的にシルクロード学研究センターの研究助成によっておこなった調査資料にのみとづいており、あえて、イラン、ウズベキスタン、中国・新疆ウイグル自治区以外の調査資料や文献資料は使用していない。さらに、イランにおいては、1999年に国立民族学博物館の映像音響資料収集プロジェクトと併行して、再度の調査をおこなっており、調査対象とした織機の事例もさらに増えている。したがって、今後においては、それらの資料を、本稿において提示した資料とつきあわせて、さらなる研究の進展をはかりたいと考えている。

註

- 1) 本稿で報告するシルクロード学研究センターの研究助成を受けておこなった調査のあと、1999年8月～9月に国立民族学博物館の海外映像音響資料作成プロジェクトと併行しておこなった調査。このプロジェクトでは、すでに「イラン機織り紀行」(長編)、「カシュカイの機織り」(長編)、「礼拝用の敷物ジルー」(短編)、「遊牧民のくらしーカシュカイの人々」(短編)、「ヤシのサンダル」(短編)などのビデオ映像資料、およびマルチメディア・コンテンツを作成しており、長編以外は国立民族学博物館のビデオテーク番組として公開している。
- 2) 「地機」という名称は、わが国では「いざり機」という名称とともに、腰当をそなえた織機の名称として歴史的に使用されてきた。しかし、本稿では、「地機」は英語のground loomに対応する織機の名称として用いる。また、わが国でこれまで「地機」、あるいは「いざり機」の名で呼ばれてきた織機の名称は、本稿では「腰機」とする。
- 3) 綜統糸が綜統棒に輪状にかけられた綜統。
- 4) わが国の腰機(いざり機など)では、一般に「中筒」と呼ばれてきた開口具に対応する部品名称。
- 5) 経糸の保持方式には、固定式以外に、可動式、垂下式があり、可動式の織機としては腰機、垂下式の織機としては錘り機が知られている。
- 6) 経糸保持具に対する経糸のかけかたの違い。平整経式、輪状整経式、擬似輪状整経式、結節輪状整経式の4方式がある。
- 7) 経糸保持具に経糸を平面的にかけわたした整経方式。
- この整経方式では、機織りのさいの布は単層であり、織りあがりの布のかたちは矩形となる。
- 8) 経糸保持具に経糸を輪状にかけわたした整経方式。この整経方式では、織りあがりの布のかたちも輪状となる。
- 9) 経糸中継棒を介して、経糸保持具に経糸を輪状にかけわたした整経方式。この整経方式では、織りあがったあとに経糸中継棒を抜き取ると、布のかたちは矩形となる。
- 10) 今回の調査では、地機の開口具の基本構成型式は、無綜統型と単式輪状綜統型を確認したのみであったが、註1に記した1999年のイランでの調査では、これらのほかに、さらに複合単式輪状綜統型と回転板綜統型の2種類を確認している。
- 11) 本稿では枠機を11種類の型式に分類している。それらのうちで、FHFFS型は機枠の設置方式が水平式、FVFFS型は機枠の設置方式が垂直式であるが、この2種類の枠機の型式の違いは、機枠の設置方式のみである。
- 12) 経糸保持棒、あるいは、経巻き棒から垂れ下がった経糸の下端に、錘りをくくりつけた織機で、錘りの重量によって、経糸に張力が付与されている。古代ヨーロッパで広く使用されていた織機で、スカンジナビア半島北部の北極圏に住むサーミ人が今も使用している。
- 13) 経巻き棒には、経糸保持棒によって、経糸の途中部分が直接保持されているばあいには、その先から経糸の先端部分までを巻き取ってある例が認められるが、このような経巻き棒は、経糸保持具のうちには含まれない。
- 14) この高機で織られていた織物は、無地織物であったが、織りの途中では、金ブラシで布面の繊維を起毛させて羅紗としていた。
- 15) 第Ⅲ部「シルクロードの織機」のイランの伝統工芸センターで使用されている高機【ITF-2】【ITF-3】では、織物の用途を「織見本」としているが、これらの織物の用途は、かつては服地であった。
- 16) アルファベットと数字によって5桁にコード化した地機の型式については、コード番号の1桁目の<G>は地機を意味している。2桁目は経糸保持具の構成型式を意味しており、<1>は経糸保持具が杭と横木(あるいは紐)で構成されていること、<2>は経糸保持具が2本の横木(あるいは紐)で構成されていること、<X>は経糸保持具が2本の杭で構成されていることをあらわしている。3桁目は開口保持具の種類を意味しており、は開口保持板、<

S>は開口保持棒をあらわしており、<X>は開口具が存在しないことをあらわしている。4桁目は綜統固定具の種類を意味しており、<Y>は逆Y字形の綜統固定具、<T>は三脚、<U>は弓状綜統固定具、は、石、木、缶などを綜統固定具としていること、<X>は綜統がなく、綜統固定具もないこと、<F>は可動式の綜統が存在することをあらわしている。そして、5桁目は整経方式を意味しており、<F>は平整経式、<C>は輪状整経式、<J>は擬似輪状整経式を意味している。

- 17) アルファベットと数字によって5桁にコード化した枠機の型式については、コード番号の1桁目の<F>は枠機を意味している。2桁目は機枠の設置方式を意味しており、<H>は水平式、<V>は垂直式、あるいは傾斜式であることをあらわしている。3桁目は経糸保持具の構成型式を意味しており、<F>は2本の経糸保持棒で構成され、<W>は経巻き棒と布巻き棒で構成されていることをあらわしている。4桁目は整経方式を意味しており、<F>は平整経式、<C>は輪状整経式、<J>は擬似輪状整経式をあらわしている。そして、5桁目は開口具の基本構成型式を意味しており、<S>は単式輪状綜統型、<W>は複合単式輪状綜統型、<X>は無綜統型、<Z>は無綜統型で、輪状綜統型経糸整列具がそなわっていることをあらわしている。
- 18) アルファベットと数字によって5桁にコード化した高機の型式については、コード番号の1桁目の<T>は高機を意味している。2桁目は経糸の保持方式を意味しており、<F>は固定式、<W>は垂下式であることをあらわしている。3桁目は経糸保持具の構成型式を意味しており、<1>は経糸保持棒と布巻き棒による構成型式、<2>は経巻き棒と布巻き棒による構成型式、<3>は錘りの付属した経糸保持棒と、布巻き棒による構成型式、<4>は錘りが付属した経糸保持棒と錘りが付属した布巻き棒による構成型式をあらわしている。4桁目は緯打補助具としての腕木の有無を意味しており、<A>は腕木がそなわっていること、<X>は腕木がないことをあらわしている。そして、5桁目は緯入補助具としての飛籽装置の有無を意味しており、<F>は飛籽装置がそなわっていること、<X>は飛籽装置がないことをあらわしている。

参考文献

吉本 忍

「手織機の構造・機能論的分析と分類」、『国立民族学博

物館研究報告』12巻2号、国立民族学博物館、1987年。
「インドネシアにおける手織機の類型論的研究」、『国立民族学博物館研究報告』15巻1号、国立民族学博物館、1990年。